

援助的サマースクールの研究IX (その2)

A Study on Supportive Summer School IX (2)

瀧 水城

(東京成徳大学大学院)

石崎 一記

(東京成徳大学)

Mizuki TAKI (Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

Kazuki ISHIZAKI (Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究では、今年度のサマースクールにおける参加者29名のうち、中学校1年生の男児Y.Mの行動を整理し、事前アンケートと期間中の行動の変化に焦点を当てて考察した。援助的サマースクール中は、自閉症の特徴が挙げられていた事前アンケートとは異なる様子が見られた。このことは、援助的サマースクールの環境とバディやスタッフとの関わりの中で変化してきたということが考えられる。

キーワード：自閉症、安心感、自己効力感、自己受容、援助的サマースクール

I. はじめに

東京成徳大学が主催する援助的サマースクールは、「浴びるほどの自然を体験すること」「異年齢の集団の中で相互作用を体験すること」「自立的な生活を体験すること」を基本方針としている。今年で9回目を迎え、8月16日から21日(5泊6日)に実施された。昨年度まで、戸隠で行われていたが、今年度は栃木県鹿沼市にて援助的サマースクールは行われた。参加者は、幼稚園年長から高校3年生までの29名であった。

本稿では、Y.Mについて焦点をあて、Y.Mの期間中の行動や様子を整理し、本スタッフとのかかわりの様子から考察する。

II. 事 例

1. 対象

名 前：Y.M

性 別：男子

年齢・学年：12歳、中学1年生

家族構成：3人家族(父、母、対象児)

障 害：自閉症(不注意優勢型のADHDをあわせもつ)

以下は、アンケートによる事前調査による特徴である。

(1) 生活習慣

- ・慣れた環境では問題はないが、初めての環境では戸惑うことが多くあると思われる。
- ・語彙が少なく、言い方が変わると文章の前後のニュアンスから察することができないので、

理解できないことがある。

(2) 対人関係

- 話しかけたい欲求はあるが、話しの内容に広がりがなく、質問⇔答えだけのやり取りになってしまう。
- 動きの激しい子どもやきつい口調の子どもは苦手である。
- 女の子を意識しすぎて極端に避けたり、目を合わせなかったりする。

(3) 性格・行動

- 穏やかで明るい性格である。
- 不安なときには、独り言を言ったり、空字を書いたりする。
- 特に強いこだわりはないが、気に入った質問を、パターンを変えて繰り返すことがある。
- 恥ずかしさの認識が弱く、年齢相応のマナーが身につけていないことがある。
- 不安なことや心配なことを打ち明けられない。
- 物事を順序立てて説明したり、要領よく仕事を片付けていくことが苦手であるが、口答でも順番を確認するほうがわかりやすい。
- 自由行動や自分で考えて好きなように等と言われると動けないことがある。

2. 参加の経緯

初めての参加で、知人にパンフレットをいただいたとのこと。援助的サマースクールに期待していることは、5泊6日の中で「一人でもできる」「自分で考える」力を少しでも芽生えさせるきっかけが作れたらとのことであった。

3. 期間中の行動

(1) 1日目

受付には両親と一緒にきて、顔をこわばらせながら受付をすませた。階段を使って2階に行くときに「説明会で会ったこと覚えている」と聞くと

「うん」と小さく頷いた。2階の講義室に入ってから名札を作ってグループの席には座ったが、少し話をしたら父親の所へ行って話していた。その後、席に戻るとまず一番近くにいたR.Nに自分から自己紹介をしていた。開会式が始まると姿勢を正して指つかみゲームをやったが、指をつかむのが難しく、なかなかつかむことができなかった。テーマソングを練習したときには、今年のテーマソング『ひまわり』を知らないと言っていたが、曲にあわせて体を揺らしていた。その後、学校を出る前に、両親のところへ行って話しをしていた。セブンイレブンの前に移動するときには早く行きたがり「まだ」と何度も尋ねていた。なかなかバスが来なかったので落ち着かなかった。

バスに乗るときには両親に向かって何度も手を振っていた。バスが出発すると途端に口数が減って窓の外の景色をずっと眺めながら空字を書いていたが、しばらくすると小さな声で「写真とっていいですか」といって携帯を取り出したので、「いいよ」と言うのと外の景色をとっていた。バスの中でサマスクの目標を色紙に書くトラジオ体操が楽しみということが書かれていた。その後高速に乗ると壁が出てきていいタイミングで写真を撮れずに残念そうに「なんで」と小さい声でいっていた。

昼食はおにぎりを3つ食べていた。昼食を食べた後は活動的になって、自分から危ない場所に入っていこうとしたり、立ち入り禁止とかいてあるところに「なんで入っちゃいけないんですか」と何度も聞いてきたりしたので「危ないからだよ」というと「わかりました」といって他の場所へ移動した。昼食後のバスの中では壁が出てくると「邪魔なんだよ。消えちゃえ。」と何度も言っていた。

施設探検ラリーでは、グループの中で年齢が一番上だったこともあり、周りからも「リーダーやってよ」といわれリーダーになると、率先して探検ラリーに必要なものを取りにいった。探検ラリーが始まると、グループのメンバーの様子を何度も

確認しながら、グループの先頭に立って進んでいった。

遊び場作りでは、初めは何をすればいいのかわからず、ふらふらと歩いていたが、ハンモックを見つけると「あれに乗りたいです」と言い、ハンモックに乗ろうとした。初めはなかなか乗れなかったが次第に乗れるようになっていった。また、ふらふら歩いているときにやっくんが丸太を持っていると「僕も持つ」といい丸太を運ぶのを手伝っていた。

夕飯では、魚のフライとご飯をおかわりし、たくさん食べていた。苦手なものは初めのうちによけていたので、残すことなくすべて食べることができた。

星の観察では、あいにくの空模様で星はあまりみえなかったが、ブルーシートの上に寝転がり、落ち着いて空を見ていた。

花火では、初めのうちは一本ずつ行っていたが、しばらくすると何本かはるにもらい、花火の束を持って歩き出し、いろいろな人に花火を配っていき最後は自分の手元に残った2本の花火をやった。

日記に何を書けばいいのかわからずこちらが今日あったことを少しずつ言っていくとそのときの気持ちを書いていた。バスからの景色が綺麗だったこと、施設探検ラリーのこと、オセロで勝ったことが書かれていた。

オセロのやり方を知らなかったので、スタッフと一緒にやっていたが H.S に勝つことができ「とても嬉しいです」と喜んでた。

寝る前には、一日の報告と寝る前に薬を何錠飲むのかわからなくなったということで両親に電話していいか聞かれ、「いいよ」というと電話で確認していた。薬の確認をした後に、「じゃあ、薬を飲むうか。」と言うと「飲まなくても大丈夫だよ。」とニコニコしながら言ってきたが、最終的にはちゃんと薬を飲んでた。就寝の時間になるとシーツをしいたりすることに時間がかかったが、最終的にはちゃんとシーツを敷き、「それじゃあ

寝ようか。」という「もう寝るの?」と書いていたが、疲れていたようにすぐに寝ていた。

(2) 2日目

行きのバスの中から楽しみにしていると話していたラジオ体操であったので起きるとすぐに着替えをし、外に出て行った。外に出るとまだ人が出てきていなかったの、トミーに「みんなが来るまで使っていないよ」言われ、ラジカセで好きな曲をかけることができ、となりのトトロを流していた。散歩では自分から進んで森の中を歩いていた。朝食ではご飯と味噌汁をおかわりし、初日の夕飯より食べた量が多くなってきた。

川遊びでは、自分から入っていかないとという話を聞いていたが、川の中へ走って入っていった。川の中ではスタッフが追いつくのも大変な速さで走って移動していた。

マスつかみでは、初めのうち、マスが集まっているところを見つけてマスをつかもうとしていたが、うまくつかめなかった。しかし、何度かやっていくうちにマスの動きや、魚のぬるぬるに慣れていき、最終的には5匹捕まえることができた。また、獲ったマスの内臓を割り箸でうまく取れず「たっきーやって」と初めのうちは言っていたが、3匹目になると「自分でやってみる」といい自分で内臓を取ることができ、「Y.M できたじゃん」という「うん」とはっきりした声でいい魚を串に刺して、ドラム缶の方へと小走りを持っていった。

昼食は、一番先にブルーシートに座り、おにぎりを食べ始めた。マスが焼けると自分で取りに行き、「すごくおいしいです」と言いながら食べていた。

午後の川遊びでは、自分から周りにいる子どもたちの輪の中に入っていった。初めは水をかけられると顔をこわばらせていたが、次第に自分から周りの人に水をかけたり、かけられたりしても笑っていた。また、土手に登って川に飛び込むという

遊びを笑顔でやっていた。

夕飯では、ご飯をおかわりしていた。ずっと川で遊んでいたのを目をしばしばさせ、少し疲れているようだったが、ご飯は残さず食べていた。

夜のゲーム大会では、フルーツバスケット、震源地はどこだ、伝言ゲームなどを行ったが、初めはルールがわからずに戸惑っていた。しかし、震源地はどこかで、隣に座っていたらいと話をしているうちに次第に笑ってゲームに参加していた。

この日の日記は、自分の体よりも大きなマスを描き、内容はマスつかみのことでいっぱいだった。この日は、スタッフがあったことをあまり話していなくても自分自身の力で少しずつ書いていた。

オセロでI.Kと対戦し、途中は勝っていたが、最後は負けてしまった。「悔しいね」と言われて「そうだね。悔しいね」と返したら「うん」と小さく頷いていた。

この日も寝る前に両親に今日あったことを電話するといい、電話していたが、初日に比べると短い時間であった。今日あったことを話し終わると「じゃあ僕寝るから」といって電話を切った。その後、「薬飲んでくる」と言い、薬を飲むとすぐに就寝した。

(3) 3日目

起きてから着替えるまで時間がかかったが、この日も一番に外に出て、初日からずっと聞きたがっていたイナズマイレブンの曲を流していた。散歩の時にはピザ作りの話が多く出てきた。

朝食ではご飯を3杯とさばの塩焼きをおかわりしていた。3杯目の時少し苦しそうだったので「お腹いっぱいだったらたっきーが食べるよ」というと「大丈夫」と言って残さずにたべていた。

ピザ作りではグループの子どもたちと協力して生地をこねていた。道具を準備するときには率先して道具を取りに行っていた。1枚目のピザを作ったときにはなかなか生地が広がらず、サイズが小さくなってしまい釜の前にお盆を置くと「もう一

枚作ってもいい」と言いすぐに作りに行こうとしたので「食べてからまた作ろう」というと「わかった」と頷き、すぐに釜の前に戻り、「まだ焼けないのかな」と焼きあがるのを待っていた。焼きあがるとすぐに食べて、すぐさま2枚目の作成に取り掛かった。2枚目はうまく生地を伸ばすこともでき、Y.Mの乗せたかった具材をすべて乗せることができ、「たっきー見て」と具材を乗せ終わったピザを持ってきたので「すごくおいしそう」というとにこにこしてすぐに釜の方へピザを持っていった。

火起しでは、初め何をすれば良いのかわからずうろろうろしていたが、やっくんが「細い枝が必要だよ」といったのを聞くとすぐに「細い枝を集めに行く」といい率先して細い枝を集めていた。また、火が消えないようにうちわで扇ぎ続けていた。

カレーコンテストでは、同じグループの子どもたちと分担し、協力して具材を切っていた。具材を切り終わるとすることがなくなり、しばらくは落ち着かずにふらふら歩いていたが、はるが「鍋に何か入れる？ ルー入れる？」と聞くと「うん」と頷き同じグループの子どもたちに「入れていい？」と確認をし、好きな調味料やルーを入れると落ち着いた。カレーが完成して「うまくなってきた」と聞くと「うん。おいしそう」と鍋の中身を見せてくれたので「すごくおいしそうにできたね」というと「うん」ととても嬉しそうに笑っていた。食べ始めると、「すごくおいしい」といいながらおかわりを2回していた。カレーコンテストの結果は優勝で、笑顔でトロフィーを受け取っていた。部屋に帰った後に「どんなメダルをもらったの」と聞くと「これだよ」といって笑顔で見せてくれた。

この日の日記には、ピザの絵が大きく描かれていた。ピザにたくさんの具材を乗せたことや、カレーをおかわりしたこと、玉ねぎを切るときに目が痛かったが頑張ってきたこと、そして、カレーコンテストでの優勝のことがかいてあった。スタッ

フは今日あったことの話をおぼろげにすることがなかったが、この日も自分で口に出して思い出しながら書いていた。

テント泊ということで本日はご両親への電話はしなかった。テント泊に必要な持ち物がわからずはるに「何をもっていけばいい」と聞きはるが必要なものは特にないということをおぼろげに伝えると「わかった」といいテントにまっすぐ向かい就寝した。

(4) 4日目

この日は前日がテント泊で、テントに何も持って行っていなかったのラジコ体操のカードを取りに部屋まで急いで戻り、着替えを済ませ広場に出て行った。急いで行くとまだあまり集まっていなかったの、「さんぽ」を流していた。散歩のときにうどん作りは何をするのかの確認をしていた。

うどん作りでは、まず初めに工芸室で竹を切り、猪口を作ったが、ここでも自分からやりたいと言ってやりはじめた。しかし、のこぎりをうまく使えず切るのに手間取っていたが、やっくんのやり方を見てアドバイスをもらおうとよくのこぎりを使い竹を切っていた。一生懸命切ったが、切ってみると底に穴が開いていることに名前を書き終わった後に気づき「穴が開いちゃったね」といったので「もう一回作る」と聞くと「いいや」といい床に落ちていた切りくずを集めて遊んでいた。うどんをこねるときにはグループの子どもたちと話し合い交互にこねていた。こね終わるとやることなくなくなってしまい不安そうに歩き回っていたので「そろそろ寝かせてある一個目のやつ伸ばしていかみんなに聞いてみようか」というと「聞いてみよう」といい笑顔でみんなに聞きにいった。生地を伸ばすときにもグループの子どもと交代しながら行き、麺を切るときにも同じグループのI.Kと協力して行っていた。また、I.Kから「Y.Mは料理がうまいね」と何度もいわれ笑顔になった。食べ始めるとざるの目に引っかかっていた細かい

うどんも残さずに食べていたので「Y.Mうどんはおいしいね」というと「うん」といい黙々と食べ続けていた。

うどんを食べ終わると、トトロの作った炭を使いみんなで炭塗りを行った。Y.Mは初めから積極的に参加し、顔を真っ黒にして「たっきー」といいながら走って私のところへ来て私の顔を黒く塗り、また他の子どもやスタッフの所へ走っていった。しばらくすると「顔を洗う」といいトイレへ行き顔を洗い、「本を読む」といい、施設の中へ戻りロビーで車の乗っている図鑑を読んでいた。

夜のお楽しみ会では、子どもたちがおぼけ役となり肝試しを行い、Y.Mも同じ部屋の子どもたちと協力しスタッフをおぼろげに驚かせていた。

この日の日記には、うどんのこと、肝試しをしたことが書かれており、「うどんおいしかったよね」というと「すごくおいしかった」と言っていた。

この日は、Y.Mに「電話する」と聞くと「大丈夫」といい、両親に電話はせず薬を飲み「もう寝る時間だよ」といい自分から布団に入った。

(5) 5日目

この日は起きるのに時間がかかったが、急いで着替えて外に出て、となりのトトロを流していた。散歩の時にはチャレンジハイキングで川登をすることについて何度も聞いてきた。

散歩のときに聞いてきた川登が、前日の天候のためできなくなったことを伝えると「そっか」と小さな声でいっていた。チャレンジハイキングが始まると初めのうちは班の先頭で歩き、ペースが速く同じグループの子どもたちが追いついていなかったの「Y.Mちょっと後ろ見てみない」というと後ろを振り向き「みんなきてないね。ちょっと待とうか」といってみんなが来るのを待っていた。途中で同じグループのR.Nが飴をもらい舐めているのに気づくと何度も後ろを振り返っていたので「Y.Mも飴食べようか」というと「うん」

といいきーちゃんのところへ行き、飴をもらって食べると「おいしいね」と言っていた。

お昼のお弁当では、苦手なトマトが入っていたが、顔をしかめながらも残さずに食べていた。また、出発のときに配られた飲み物がなくなったので「ペットボトルにお茶入れようか」というと「入れる」といいペットボトルいっぱい自分でお茶を入れていた。

山を登る前に手をぶらんとさせ、疲れた様子だったので「Y.M 疲れた」と聞くと「大丈夫」言っていた。山を登り始めると「少し足が痛いね」と言っていたので「そうだね。疲れたね。少し休もうか」というと「大丈夫」と答えた。頂上が見えてくると「あとちょっとだね」と言っていたので「そうだね。あとちょっとだね」と答えると「頑張ろう」と言っていた。頂上に登ると「高いね。綺麗だね」と言っていたので「高いね。たっきーは高いとこ少し怖いんだけど Y.M は大丈夫」と聞くと「平気だよ」と答えた。山を降りるときには、グループの先頭を歩き「足すべるよ」とグループの子どもたちに声をかけながら降りていった。

山登りが終わり、みんなで休憩しているときに私が「Y.M 疲れたね。足痛いのは大丈夫」と聞くと「疲れたけど大丈夫」と言っていた。

施設に帰りスイカを一切れ食べると「あっち行っていい」とハンモックの方を指差したので「ハンモックしようか」というとハンモックまで小走りにかけていきハンモックに乗り「揺らして」といったので揺らすと「もう大丈夫」といいしばらく揺れるハンモックの上で目をつぶっていた。

バーベキューの時には、Y.M の両親が来ていたので両親を見つけ話しに行ったが、グループごとに集まりだしたのを見て「行ってくる」といいグループのほうへ戻っていった。率先して肉の塊を切り、一枚目を分厚く切ると「これ僕食べていい」と聞いてきたので「いいよ。大きく切ったね」というと「おいしそうだよ」と言っていた。その後は、グループの子どもたちと協力し、すべての

具材を丁寧に切っていった。鉄板が熱くなると、一番初めに分厚く切った肉を乗せ「僕食べるんだ」と言っていたので「おいしそうだね」というと「うん」と頷き、肉が焼けるのをじっと待ち、食べると「すごくおいしいよ」と笑顔で言っていた。また、途中で何度か遊び場に行くこともあったが、戻ってきて焼きそばなどを食べていた。食べ終わると皿洗いなど率先して行っていた。

別れの集いで、施設の入り口に集合し、バディと手をつなぐときに今までは自分からつなごうとあまりしなかったはると自分から手をつなぎにいった。別れの集いが始まると、火が燃えているのを見て「暖かいね」といいながらずっと燃えている火を見ていた。一人ずつ今感じていることやこれからの目標を言う場面では、はじめどのように言えばいいのかわからず「なんていえばいい」と聞いてきたので「はじめに Y.M ですって行って何が楽しかったかみんなに教えてあげて」というと「うん」と頷き、目標の部分ではバディに聞かずに自分で目標を言っていた。

この日の日記は初めて、文章だけの日記を書いた。自分で「こんなことあったよね」といいながら、山登りで足が痛かったことやバーベキューで食べたものことなどを書いていた。

この日は部屋に戻ると「眠い」と言っていたので「歯磨きと薬だけやっちゃおう」というと歯ブラシと薬を持って洗面所へ行き、すばやく済ますとすぐに布団に入り眠った。

(6) 6日目

この日は朝起きてから両親の様子を見に行き、その後外へ出た。外へ出ると Y.M より先に外に出ていた子どもがいたが、他の日と同様に好きな曲をかけた後、他の子どもが聞きたいと言っている曲をラジカセで流していた。散歩のときに「今日は何するの」と聞かれたので「今日は朝ごはん食べて、帰りの準備をして、サンドイッチを作って食べたら帰るんだよ」というと「そっか」と小

さな声で頷いた後「寂しいね」といっていたので「今日で終わりは寂しいね」というと小さく頷いていた。

昼食のサンドイッチ作りで、全員が集まっていないときに「もう作っていい」と聞かれたので「みんなが来てからつくろっか」というと「そうだね。みんなを待とうね」といっていた。初めに作ったサンドイッチはチョコレートクリームを塗り、甘いサンドイッチを作ったが、二回目にはハムなどを入れて作っていて「おいしいね」といって食べていた。

帰りのバスでは行きにとることができなかった風景の写真をとりながらずっと窓の外を見ていたが、「眠いね」といって私の肩に寄りかかって少し寝ていた。途中 Y.M の両親が運転している車を見つけると両親に向かって手を振っていた。東京に入ると「帰ってきたね」といい私の肩に寄りかかりながら眼を閉じていた。

セブンイレブンの前にバスが到着し、荷物を玄関の前に置き二階にあがると「どこに座ればいいの」と聞かれたので「あそこだよ」とグループの席を指差すとそこへまっすぐ向かい座った。グループごとに表彰をし、Y.M と一緒に両親のもとへ行くと両親に「バスの中で手を振ったのわかった」と聞いていた。その後、写真をとり二階の廊下で話していると「楽しかったね」といわれ「うん。Y.M といっぱい遊べて楽しかったよ」というと「うん」と頷いていた。門のところまで見送ると姿が見えなくなるまで、何度も後ろを振り返り手を振っていた。

4. 事後のアンケート

今年度の援助的サマースクールについて、保護者にアンケートを行った。以下は、アンケートによる事後報告である。

帰宅後、Y.M が家で話したことは、自分たちで色々な料理をしたことや初めてチャレンジすることがたくさんあったこと、オセロなどわからな

いときにはちゃんと教えてくれたこと、5泊6日でも寂しい気持ちにならなかったこと、サマースクールで、できるようになったことをこれからやってみたいということ、自分でいろんなことができるということがわかったということなどが挙げられていた。

また、料理が楽しかったようで、家でも自ら作りたいと言うことや手伝う機会が増えたり、学校の友達に自分からメールアドレスを聞くなど以前より積極的になったように思うとのこと。

今まで行事の写真を見ることを嫌がっていたのだが、サマースクールの写真を見ることは平気だったようである。

一番印象に残っていることは、自分でいろんなことができたことで、今回できるようになったことは、はしごに登ること、ハイキングでリーダーになったことであった。

Ⅲ. 考 察

Y.M と6日間の活動をともにし、事前のアンケートに書かれていたことと異なる点が多く見られたことについて、そしてY.M の行動の変化について安心感、自己効力感、自己受容をキーワードとして考察していく。

1. 事前アンケートとの比較

事前アンケートに記入されていた Y.M の様子と援助的サマースクール期間中の Y.M の様子では異なる点が見られた。

自閉症の特徴として、社会性の特徴、コミュニケーションの特徴、想像力の特徴という3つの特徴が言われている。Y.M の事前アンケートでは、社会性の特徴として、年齢相応のマナーが身につけていないということ、コミュニケーションの特徴として、質問⇔答えだけになってしまうということ、想像力の特徴として、自由行動や自分で考えて好きなように等と言われると動けないことが

あるということが挙げられていた。

また、新規場面での不安や緊張、言い換えの理解が難しいこと、話しかけたいが、話しの内容に広がりが無いということ、動きの激しい子どもやきつい口調の子どもは苦手で、女の子を意識しすぎて極端に避けたり、目を合わせなかったりすることが挙げられていた。

しかし、援助的サマースクール期間中は、初日の昼食前のバスの中では口数も少なく空字も見られたが、それ以降空字は見られなかった。また開会式の時から積極的に参加者やスタッフに話しかけており、その際には質問⇔答えだけではなく。ネイチャーランドに到着後は、スタッフによって場所の言い方が変化することもあったが問題なく行動しており、3日目には、みんなで鬼ごっこをしており、5日目の別れの集いでははとも手を繋ぐ場面が見られた。

このように事前のアンケートとは異なる点が多く見られたのは、日常の生活とは異なり、援助的サマースクールではしなければならないことは無く、時間的制約がない場であったからではないかと考える。

2. 安心感

Y.Mは初日の昼食前、行動する前にスタッフに確認を求めてきたが、ネイチャーランドに到着後は確認ではなく報告へと変化してきた。このことは、バディやその他のスタッフとの関わりが、Y.Mに『やってはいけないことはなく、自分のやりたいことを伝えると一緒に活動してくれる』という安心感を与えたのではないだろうか。そのことによって、援助的サマースクールでは、しなければいけないことや自分自身がやりたいことをできないということが無く、Y.M自身のやりたいことをやりたいときに行えるということを理解し、自分らしく行動していったと考える。

3. 自己効力感

援助的サマースクール期間中に Y.M はグループのリーダーとなり、班での活動の時に率先して動いていた。しかし事前のアンケートには、時間内に何かをやり遂げた経験が少なく、自信を持って行動することが少ないということが書かれていた。

Bandura (1982) は、強力な効力感を作り出す最も効果的な方法は、制御体験を通したものである。その体験は、成功するために必要なことは何でもできるという確証を与えることになることと述べている。まさに援助的サマースクールは Y.M にとってこのような場であったのではないかと考える。また、グループのメンバーから Y.M に対して、頼ったりお願いしたりすることが多々あったということも関係している可能性が考えられる。そして、援助的サマースクールでは、時間に縛られて何かをしなければならぬということではなく、初日の施設探検ラリーや2日目のマスつかみ、3日目のピザ作りやカレーコンテスト、4日目のうどん作り、5日目のチャレンジハイキングなど Y.M のペースで活動をやり遂げることができたという成功体験も大きく関わっていると考えられる。

4. 自己受容

援助的サマースクールの初日の夜に持ってきた薬をそれぞれ何錠ずつ飲めばいいのか不安になり、バディに両親へ電話をかけていいのか尋ねたり、2日目のオセロ大会で I.K に負け悔しいと話していたり、5日目のチャレンジハイキングにおいて少し足が痛いと話していたことなど Y.M は自身の否定的な感情や心配なことを言葉にしていた。事前のアンケートには、不安なことや心配なことを打ち明けられないということが書いてあったが、援助的サマースクール期間中に言葉に出すようになった。

心理学辞典 (1999) によると自己受容とは「自

己のありようをそのまま受け入れること」と定義されている。そのために近藤（2004）は、「自分を映し出すカガミが存在しない限り認識が困難である」と述べている。

援助的サマースクールでは、パディやスタッフが Y.M の感情を映し出すカガミの役割となっていたためではないかと考える。そのため、Y.M は自身の否定的な感情に向き合い言葉にできるようになったのではないだろうか。

IV. 終わりに

Y.M にとって初参加となった今回の援助的サマースクールの 6 日間を振り返ってみると、Y.M は日が経つにつれ、自分の要求を出せるようになり、自分らしく期間中の時間を過ごせるようになっていった。それは、考察でも述べたとおり、日常生活とは異なり多くの制約がないということと活動を通して自己受容することができ、自己効力感が高まっていったためであるのではないだろうか。

ありのままの自分を出すことができ、それを無条件で受け入れてくれる人たちがいる環境によって、Y.M は変わっていったように思う。このような貴重な体験をさせてくれた Y.M やすべての関係者に感謝したい。

引用文献

- Albert Bandura 1997 Self-Efficacy in Changing Societies (アルバート・バンデュラ編 本明寛監訳 野口京子監訳 1997 激動社会の中の自己効力 金子書房)
- 近藤卓編著 2004 パーソナリティと心理学 コミュニケーションを深めるために 大修館書店
- 中島義明他編 1999 心理学辞典 有斐閣